

自 叙 伝 (3)

エドウィン・ミュア著
横山 竹己訳*

An Autobiography by Edwin Muir

Takemi YOKOYAMA

私は、我々の大昔の先祖たちよりもはるかに知ることの少ない我々の能力の一つに常に魅了されてきた。その能力とは、動物との目に見えないが、直接的な関係を察知する能力である。この関係があるために、先祖たちは自分たちの英雄に動物たちが体現している特性を賦与した。力強いがゆえに雄牛と呼び、勇気があるゆえにライオンと呼び、狡猾であるゆえに狐と呼んだのである。我々にとって、そうした時代は、紋章に出て来る人物や伝説的な動物が住んでいた伝説的な時代である。聖人や王冠を被った皇帝たちが虎や象や猿の間を歩いているインドのレリーフにそうした時代の反映がみられるし、アッシリアの人間の顔をもち、翼をもった雄牛にもその反映がみられる。即ち、それは天使、動物、人間が一体となっていた時代である。人間と動物のこのような一体的関係を感じていた時代は、我々の知る短い歴史的時代よりもはるかに長かった。それゆえ、それがどんな時代であったか我々には想像できないほどであるが、我々の無意識の生活はその時代に遡って行くのである。あの時代は、すべてのものが伝説的であり、動物は、動物の寓話の登場人物のように振る舞っていた。神聖な動物もいれば、奇怪な動物もおり、また一家の守り神のように風変わりや、醜い動物もいた。動物はまた崇拜され、生贄として捧げられ、また狩猟の獲物ともなった。そして、狩猟は、崇拜や犠牲的行為と同じように、儀式的行為であった。彼らは、森の最初の戦の中心的存在で、半人半獣、半

人半鳥であった。そこから家庭、それから共同社会、そして芸術が生まれた。人間はこうした動物に罪を感じていた。人間は、いつ始まったかわからないほど大昔にできた習慣に従って、日々、動物の命を奪ってきたからである。人間は彼らの命を奪ってきたが、彼らは神聖な生き物であった。なぜなら、彼らを殺さなければ、人間は生きていけなかったからだ。動物が山のように大量に積まれたとき、それは動物の王国によって生贄として捧げられたものだった。何十万という動物が、罪もないのに、運命という掟によって自らの命を捧げたのである。人間は動物を飼い慣らし、鋤や製粉機につないだ。また肉を食べるために動物を太らした。そのミルクを飲み、服をつくるために羊毛や皮を使い、装飾やゴブレットをつくるために角を使った。そして、一つ屋根の下で暮らした。こうした生活が長い間続いた。これに比べると我々の知っている時代は、ほんの一日である。人間は動物の命を奪う必要があったし、またその罪を受け入れなければならなかったので、命の奪い方が大事であった。そこから儀式が生まれた。儀式では必要性和罪の観念が一つになり、殺戮が秘儀となったのである。

私は動物が好きだ。どうして好きなのかよくわからないが、一つには、人々が二百年前からずっと生活してきた場所で、動物と身近に接しながら、育ったからである。二百年前、たいていの人々は動物と間近に接しながら、動物の労役と肉によって生活していた。人々が動物に依存しながら生活していることは今も変わりはないが、動物との親密な関係はなくなり、同時

2014年10月22日受理

* 東北工業大学名誉教授

に、必要性和罪の観念もなくなってしまった。我々が食べる動物は、何千頭と我々が決してみるものない屠殺場で殺されている。合理主義者たちは罪だという考え方を一笑に付すだろう。あるのは必要性だけで、それは人間だけでなく、すべての肉食獣に当てはまることだと言うだろう。だが、我々の夢と先祖の記憶は、これとは違った考えをもっている。実際、肉食主義者たちは他のだれよりも正直だ。これに比べると、合理主義者たちは不誠実だ。彼らは罪を受け入れず、ただ避けているにすぎないからだ。

多くの人が動物の夢を見るのかどうかかわからないが、こうした動物の夢は、大都市で二、三代にわたって暮らしている家族からは消えているだろう。これを知る術は私にはないが、我々の先祖の大多数を含め、動物と身近に接しながら育ってきた人たちは動物の夢を見てきたし、また見ているのは確かだ、私自身の経験でも、これらの夢は我々が気づいていない罪に染まっている場合が多い。これらの夢は子どものときの私自身の世界に溯る。それゆえ、ここでその夢を語るのが一番よいと思う。もし自伝的小説で自分の人生を再現するとすれば、これらの夢を自由に取り出し、世界に対する我々の最初の直感が広大なイメージにどんどん膨らみ、知らないうちに我々が演じる神話を作り出す様子を示すことができるだろう。もっとも、食べたり、飲んだり、眠ったり、働いたり、さらに息子や娘をもうけるためにお金を稼ぐといった我々の外的生活は、いつものように続いているのだが。もし自伝的小説を書くとしたら、これらのイメージを自由にたどっていくことができるだろう。だが、事実には忠実でなければならないし、また事実を適所にはめ込むように努めなければならない。

明らかなことだが、どんな自伝も人の誕生から始めることはできないし、また我々は過去や未来に自ら設定できる境界線をはるかに越えてしまう。さらに各人の生活は人間の生活の終わることのない繰り返しである。同じ理由で、自伝は意識的な生活に限定されないし、我々の生活の三分の一を過ごす睡眠も一種の経験であり、我々の夢も現実の一部であることは明らかである。我々の意識的生活それ自体はとくに興味深いものではない。だが、現実に存在しない我々、決して存在しえない我々、即ち、我々の寓話は、私にとっては実に興味深いものである。私は寓話を書いてみたいと思うが、寓話を生きることはできない。私の外面的な人生行路を語ることでできることと云ったら、寓話から自分がどれだけ逸脱しているかを示すことぐらいで

ある。これさえも不可能である。というのは、私は寓話を知らないし、また寓話を知っている人も知らないからだ。寓話の一、二段階ぐらいのことは知っている。無垢の時代と、奈落と奈落から生じた劇的な結果の時代だ。だが、これらは、経験の表面上ではなく背後にあるものであり、歴史的な出来事ではなくて、寓話の段階なのである。

だれよりも自伝作者に執拗に立ちをはかる問題は、「どのようにして自分自身を知ることができるか」という問題である。この本の中で私は自分自身のことを書いているが、自分の本当の姿はわからない。自分の名前、生まれた年月日や場所、住んでいた場所の様子、出会った人々、それに自分がやってきたことなどは知っているし、また自分の行動、考え、感情の多くに影響を与える社会のこともいくらかは知っている。歴史についても少しは知っているし、そのような社会がどのように生まれたかも大雑把に説明することもできる。こうしたことはみな知っているが、それは、外面的なことで、あてにはならないものだ。それは、まるで私が人類と共謀して作り上げた味も素っ気もない伝説のようなものだ。この伝説は、子どもたちが鬼ごっこなどの遊びの中で前提とする協定に基づいてつくられている。協定とは、区別のために年月日には数字が与えられ、民族や国々、その他のものにそれぞれ名前がつけられるというものである。もちろん、生活のためにこうしたものはみな必要なのであるが、それはまたごまかしである。これらの数字や名前を知ったところで、自分のことを知ったことにはならないし、世界の他の人々を知ったことにすらならない。あるいは友たちと呼べる少数の人々を知ったことにもならない。この外面的なアプローチは、どんなに完璧でも、自分自身や他の人々について多くのことを教えてはくれないだろう。

ひとりの男性の外見のことを考えてみよう。彼の外見は、彼について多くのことを教えてくれるはずである。彼はその外見を見るのが決してできない。つまり、その外見を見ても自分自身を知ることが決してできないのだ。自分だけでなく、自分の顔を見つめるときの不安や希望をも忠実に映し出してくれる鏡で自分の顔を見ても、これが自分とは思わない。実際、どの顔にも言えることだが、彼が見る顔には、ある程度納得できるところがある。顔には経験、思想、回避、決意、成功、失敗、苦しみ、そしてある程度のやすらぎが刻み込まれている。顔はどんな求めにも応じてくれる。顔はいとも簡単に——このことは疑いの余地はな

い——他者をみんな欺く。彼は、自分の顔が自分と時間の奇妙な、気乗りしない共働で作られることを知っているが、時間はとても強力なパートナーであるため、時間以外に何もなければのように思えるときがある。というのは、彼は——皺が残るということを考えずに——自分で一本一本皺を刻んでいくのだが、時間は彼に配慮することなく、選択の原理によってその皺を刻印してしまうからである。もし彼が正直にその結果を見るならば、「お前はこれを受け入れなければならない。私はその皺を守ってきたのだから」と彼に確信させるのは時間であり、そう告げるのも時間である。ところが、時間が守っているものは彼が守ってたくないものである。それで、彼は、どこへ行くにも持ち歩いているこの顔に苦しめられ、この顔をとり壊して、別のものにつけ替えたいと思うことがあるのだ。これができるのは死だけであって、時間との合作によるこの結果から逃れることは不可能である。ひとつの顔に見えるように構築されたこの顔には絶対的な「もっともらしさ」があるが、もしその人が写真でその顔を見れば、それはだれか別の人間の顔に見えるのである。

今度は人の行動を取り上げてみよう。我々は、彼がオフィス、あるいは炭鉱で働いているとか、証券取引所で株を売買し大金を儲けたとか、かつて南極に到達したとか、あるいはインドのある州を統治していたとか、レースに勝ったとか、またライ病患者を看病するために、あるいは異教徒の魂を救うために仕事を辞めたといったことを知っているかもしれない。確かに、こうしたことは彼に関して何かを教えてください。オフィスで働いたり、証券取引所でお金を儲けたり、南極に到達したり、あるいは異教徒を改宗させたりすることは、その人に何らかの影響を与えるだろうし、またその人の条件となるであろう。事務職員と坑夫とは似ていないし、株式仲買人と探検家も似てはいない。こうしたことは他の多くのことについても言えることで、ケンジントンに住んでいる人とウォッピングに住んでいる人とは違うのだ。この違いは大事であるし、この違いは様々なゆがみによって生じているのである。炭坑で働くこと、オフィスで働くことがそれぞれその人をゆがめるのであり、また証券取引所で身代をつくることもまたその人をゆがめるのだ。もっとも、商売の世界では、このゆがみはそれほど目立たないかもしれないが、探検家や宣教師の場合は、それほどその人をゆがめる必要はない。坑夫は教養ある生活を送ることができないが、社会が坑夫に対して罪を犯しているのである。株式仲買人は教養ある生活をしようと

せずに、社会に対して罪を犯しているのだ。とにかく、そこには罪があるのだ。罪の根源がどこにあるのか明らかにするのは難しいが。こうしたことは極めて大事であり、坑夫と株式仲買人が教養ある生活をするまでは、こうしたことは解決されないであろう。

しかし、こうしたことは、自分の真の姿を見つけようとするとき、あまり役に立たない。我々には、たとえ不十分でもまた無駄でも、本当の自分を知らうとする必然性があるのだ。これについて、かつては宗教が教えてくれたが、我々の生活は今や宗教には縛られなくなっている。だが、宗教の仮説のいくつかを受け入れさえすれば、我々が何者であるかを知ることができる。人間は不滅の靈魂としてのみ理解することができるのであり、こう理解したとき、人間は幼い子馬同様に、自然なものとなるのである。人間を自然界のほんの一部分と見なそうとするならば、人間はまったく不自然なものになってしまうだろう。人間は生まれた世界によって様々な形にゆがめられ、墮落させられた不滅の靈魂なのである。美しい格好、風変りな格好、あるいは異様な格好など、様々な格好をしたり、平凡な生活、センセーショナルな生活、退屈な生活など様々な生活を送り、店で働いたり、ドッグレースに行ったり、ピリアドをやったり、アフリカの未開人に説教したり、切手を収集したり、スコットランド北部のハイランズで鹿狩りをしたり、五十年間オフィスで数値の計算をしたり、ビジネスでお互いを破産させたり、他の男女を大量破滅させる爆発物を発明したり、停戦を祈ったり、罪を悔い改めたり、あるいは、罪とは一体何なのかを知らうと努めたり、人間の考えられ得ることをすべてやり、しかも歴史の各段階でそれぞれ異なるやり方でやったりと…。人間が不滅で、魂が存在することを証明する力は私にはないが、そのような証明があるにちがいないこと、またその証明と比べたら、他のすべての証明は無意味なものだということを私は知っている。私の信じていることに根拠はないのだが、実際、靈魂が不滅でない人生など私には考えられない。もし人間が直系の動物なら、人生は、シルクハットやキッド革製の手袋を身につけ、口紅や頬に化粧を施し、温まった部屋でおしゃべりしたり、情欲にかられて鼻づらを互いにすり合わせたり、そつのない策を数限りなく弄したり、音楽をつくり聴いたり、夕陽を眺めて感傷的になったり、あるいは計算したり、ユーモアのセンスを学んだり、何かの大義のために命をささげたり、あるいは祈ったりする動物たちが住む悪夢の世界でしかないであろう。

こうしたイメージが一九一九年のグラスゴーでのある夏の夕刻以来、私の心の中に沸いていた。当時、私は靈魂不滅を信じておらず、ニーチェの勉強に没頭していた。我々がいま、ここでしている生活以外の生活があるなどという信仰は、直接的経験の純粹性を汚すものとして、大きな開放感と共に、投げ捨てていた。そして、この直接的経験は罪のないものであり、善悪を超えたものと私は知的に確信していた。私は仕事を終え、路面電車で帰る途中であった。電車は人で一杯であり、とても暑かった。太陽が窓ガラス越しに首、肩、顔、ズボン、スカート、手などを万遍無く照りつけていた。向かいには豚のような顔をした男が座っていた。むしむしする暑さの中、彼をじっと見ていると、「これこそが動物だ」という言葉が浮かんできた。電車に乗っている他の人々を見ると、彼らからもまた私からも何かは抜け落ちていることに気づいた。彼らはみな動物なんだと私は思った。わびしい気持ちになった。善良な動物、邪悪な動物、魅力的な動物、悲しみにくれている動物、幸せな動物、病気を患っている動物、健康な動物などがいた。電車は停車し、動物たちを乗せて、また発車した。私は、動物たちがまるでサーカスで訓練されたかのように機械的な器用さで座ったり、乗ったり、降りたりしている他の多くの電車を思い浮かべていた。グラスゴーでも、スコットランドでも、そして世界中で、何千何百万人という生き物が動物の生活をし、まるで大きな屠殺場へ向かうように、動物の死へと向かっているのであった。私は乗客の顔をじっと見つめながら、こうした生き物を再び人間に戻そう、またこうした妄想を払い除けようと努めたが、できなかった。この経験はとても恐ろしい経験だったので、私は精神がもっている自らを抹消しようとするあのつむじ曲がりの力によって、この経験を無視し、あえて記憶から追い出した。数分間、私はスウィフトの世界に住んでいたような気がした。スウィフトの人間の見方は動物の見方だからである。数分を越えていたならば、その世界に耐えられなかったであろう。当時、私はそれをニーチェと関連づけて考えてはいなかった。人間が群れ集う考える動物だということには耐えられないということを知っていたし、またどこかに——場所はどこでもよかった。グラスゴーや香港やホノルルの郊外でも——生きた魂がなかったならば、人間の生活は奇妙で人間にそぐわない、荒廃した生活になってしまうことも知っていた。一時期、私はこうした考えを払い退けていたが、少年のときの臆病の記憶のように、後年こうした考えが再び蘇ってきたのであ

る。

動物の世界というのは、非人格的な秩序であって、苦しみの中にあっても、悲哀を感じることはない。人間は必要性和罪で動物と結びついているし、また同じ呼吸をしているから、命のより密接な絆で結びついている。しかし、人間が自然の中に飲み込まれると、自然は墮落し、人間も墮落する。『リア王』における墮落というのは、ゴネリル、レーガン、コーンウォールが、意のままにもったり、捨てたりできる武器をもった動物と同様、人間の能力、それも受け継いだのではなく盗んだ能力をもった動物にすぎないということから生じている。彼らの言葉は、相手に食いついたり、引っ掻いたりする道具であり、彼らの考えは死を招くばねの技法である。彼らは完全に自然に属している点で極めて不自然であるため、グロスターは彼らを「これらの最近の太陽と月の食」によってしか説明できないのである。『リア王』において自然は奇怪なものとなっている。人間が自然に飲み込まれているからである。

忠実なしもべさ、ご主人にもご婦人にも誇りをもって仕えたもんだ。髪をちぢらせ、愛のしるしの手袋を帽子に飾り、奥方様のご要望にこたえて内緒の勤めまでしたもんだ。口から出まかせに誓いを立て、おてんとう様の見ている前でそいつを破ったもんだ。寝ては女をものにする手だてを考え、起きてはそいつを実行した男よ。酒は溺れるほど好き、博打はふところがうずくほど好き、女はトルコの王様もおそれいって言うほど好きな男よ。心はすぐ向きを変え、耳はすぐ悪事に乗り、手はすぐ血にひたす、怠惰にかけては豚、狡猾にかけては狐、貪欲にかけては狼、狂暴にかけては犬、獐猛にかけては獅子って男よ。…

これは、誇り高い、ちぢれた髪によって墮落し、伝説化した人間の能力をもつ動物の姿である。リアの葛藤は、古い人間社会の聖なる伝統と背景がないために常に新しい自然との葛藤である。グラスゴーの路面電車に座っていたとき、私は歴史的でない世界にいた。また時間の外にいたが、永遠の中にいたのではなかった。動物の小さい、官能的な、瞬間的な世界にいたのである。

だが、人間は魂をもっており、しかも不滅なる魂をもっていることを私は信じている。そう考えなければ、人生など考えられないし、奇怪なものになってしまう

からだけではない。人間は考える動物にすぎないと信じ、人間を奇怪なものと考えない人が多くいるということも私も知っている。また反対に人間は考える動物にすぎないと信じつつも、奇怪な存在だと考えるが、ありそうにもない存在ではない、つまり、スウィフトのように、悪夢を受け入れるが、それ以上は認めないという人もわずかにいることも知っている。しかし、これを受け入れる力をもっている人は多くはないと思う。人間を考える動物と考えている大多数の人々は、人間を理想化し、人間が将来いつか超越した高みにまで達することができると思っているから、そう考えるのである。こうした人たちは自助力というものを熱心に信じているセンチメンタリストなのだ。私の霊魂不滅の信仰は——その起源を推量すれば、そしてその推量はそれほどはずれてはいないと思う——自分を知りたいという衝動と結びついているように思われる。私は自分自身を知ることはできないが、自分自身について知れば知るほど、自分が不滅だといっそう強く確信するにちがいないのである。また逆に、自分の不滅を確信すればするほど、いっそう深く自分を知るようになるにちがいないのである。というのは、私は、不滅を信じない人たちがこの世の東の間の人生にそぐわないものとして無視し、拒絶する経験のクラスに出席し、聴講するつもりだからである。私のいう経験は、実用的な面ではほとんど役に立たないし、ましてや経済的、政治的利益にはならない。こうした経験をするのは、自分を自分の意志と時間が作り上げた人格としてほとんど意識しないとき、つまり、瞑想していて自分の身体を意識しない、実際、手足のついた身体をもっていることを意識しないときであり、悲しみに意気消沈しているときであり、友達と楽しい時間を過ごしているときである。また夢や空想に浸っているときもそうだし、睡眠の前後に生じる、体が浮いて肉体が半ばなくなる状態のときもそうだ。これは自己忘却が完全なものとなっているからである。こういった時間に私はほんとうの自分と同時に霊魂不滅を知ることができるのではないかと知っている。眠りは我々自身のことや他のやり方では発見できない世界のことを教えてくれる。我々の夢は経験の一部である。幼年時代の夢のことを考えると、このことは明らかである。もし本書に多くの夢が書かれているとすれば、私が意図的にそうしているのである。というのは、雑多なつまらない経験の中から希少な霊魂不滅の閃光を救い出したいからである。

私はこれまで家畜、野生の動物、それに伝説上の動

物の夢をたくさんみてきたが、ここではそのうちの一つの夢について述べてみよう。この夢は、私がこれまで書いてきた二つのこと、つまり、運命的な罪を含む動物の世界と我々の関係、それに我々の霊魂不滅、この二つを想像豊かに表現しているように思えるからだ。すべての罪は贖いと解消を求めている。我々の動物にたいする流血の罪も、人と動物が仲睦まじく暮らし、ライオンも子羊とともにまどろむような日の夢の中に罪からの解放を見出そうとしている。私の夢はこの夢想と結びついていた。部屋の灯りが私を目覚めさせたとき、私は自分が眠っている夢をみていた。ひとりの男が私のベッドの側に立っていた。彼は褌がそよともしない長いローブを着て、円柱のように立っていた。部屋を満たした光は、不動の火鉢のように、燃えながら、頭から屹立している髪の毛から発していた。彼は手をあげ、私に触れずに、私を立ち上がらせた。それで、私は彼の前に立った。彼はきびすを返して、扉から出て行ってしまったが、私は彼の後を追った。我々は修道院の回廊にいた。月は輝き、回廊のアーチの影が敷石の上に黒いリブを作っていた。我々は通りを進んでいたが、その突き当りには野原があった。そして、さらに歩いていくと、月明かりは早朝の白光と化していた。最後の家並みを通っていたとき、ひとりの色黒でみすばらしい男が手に短刀をもっているのを見た。この男の脚にはぼろ切れが巻きつけられていた。それで彼は足音をまったく立てずに歩いていた。また彼の袖のひとつに血痕のようなものが付いていた。私は彼が強盗か人殺しではないかと思い、怖くなった。だが、彼が近づいてくると、私の側にいる人物を凝視していた彼の目がこれまで見たこともないような深い、熱烈な崇敬の念に満たされているのを見た。さらによく見ると、彼の後には、妙な服やぼろ服をまとった男女が大勢乱雑に群がっていた。この大勢の男女もみながみな私の側を歩いている男に同じように崇敬の目を向けていた。彼らの顔を見たのはほんの一瞬だった。ほどなくして、我々は野原に出たが、近づくにつれ、野原は、人の頭より少し小さい円錐形の丘が点在している広々とした平原に変わっていった。平原のいたる所に動物たちがこの小さな丘の上に立ったり、腰をおろしたりしていた。ライオン、虎、雄牛、鹿、象などがいた。蛇もまたとぐろを巻いていた。そしてこれらの動物はそれぞれ孤立していたが、ゆっくりと祈るかのように、頭を少し上にもたげていた。頭をもたげている仕草には妙に厳肅さや思慮深さが伴っていた。何か真実が実現したと宣言しているかのように、

あるいは抗しがたい力によって動かされているかのように動物たちがみな頭を上にもたげているのを私はじっと見ていた。象も鼻を上にかざしていたが、この間接的な崇敬の行為は何か哀れで愚かしく思われた。他の動物たちも、あたかも新たな日が始まろうとしているのを、太陽と同様、知っているかのように、朝日を避けることができないのと同じように避けられないと思いつつ頭をもたげ、新たな日の到来の合図をしていた。子犬が、動物が救済されたのを知らないかのように、地面に鼻をくっつけながら、忙しく走り回っていた。この犬は人なつこい子犬で、忠実に自分の任務を果たしていた。この子犬もこの日の役目もっており、子犬の大地への関心は一種の崇拜行為のように私には思われた。この夢がどのように終わったかは覚えていない。ただ今覚えているのは、大勢の動物たちがみな天に向かって頭をもたげている姿だけである。

この夢を見たのは、オークニー諸島を去ってからかなり後のことだった。私はロンドンに住んでいて、精神分析の治療を受けていた。この時期、数えられないほどたくさんの夢をみたが、そのたくさんの夢の中で、私は竜とか神話に出てくる怪物に出会った。精神分析医の説明は、長い間私の中でこれらの動物を抑えてきたために、今このように激しく恐ろしい形で出てきたのだらうというものだった。彼の考えはある程度までは正しかった。というのは、私は成人してからピューリタンになったからだ。そして私の精神は解放されたが、感覚は未だ縛られたままだった。しかし、彼が正しいのはある程度までである。というのは、これらの怪物に関して不思議なことは、これらの怪物が私を怖がらせなかったということであり、他方、私は怪物に妙に親しみを覚えたということである。私を怖がらせた怪物を一種だけ覚えている。それはうなり声をあげていた巨大な海獣だった。私はボートの中で立ちながらオールでこの海獣と戦おうとした。私はたくさんの恐怖の夢をみたが、この夢を除いて、動物が関わった恐怖の夢はほとんどなかった。この時期にみた夢のほとんどは、今述べたような原始の夢とか至福千年の夢であった。我々の精神は、三つの神秘にとりつかれている。第一は、我々がどこからきたか、第二は、どこへいくか、そして、第三は、我々は一人ではなく、無数の家族の一員であるから、お互い同士どうやって生きるか、この三つである。これらの問いは一つの問いから派生しており、それぞれの問いは他の問いと切り離せないし、また単独で扱うこともできない。これら三つの問いはみな私の動物の夢と関わっているのだから、

というのは、その夢は人間と動物の関係に触れており、人間の起源を暗示しているからだ。一方、天の栄光に包まれ、人類と和解した動物王国のイメージでは、その夢は人間の目的と人間社会での生き方を同時に暗示している。というのは、その問いは人間の目的とは何かという問いと切り離せないからである。

その夢には千年至福的な雰囲気や、あるいは精神分析医の言葉で言えば、人種の無意識のテーマがあったが、私が生まれてから最初の数年が反映されていた。丘は子ども時代の小さな青々とした丘であり、私のベッドの脇に現れた人物は子どものキリストであった。至福千年という出来事は、ブー (Bu) で、バクスター博士の本を読んだ後、私の両親が度々議論していたものであった。私はただ聞き入っていたが、いつのまにか、今ではもうとっくの昔に忘れられてしまった自分流の楽しい絵を作り上げていた。我が家では聖書に関してたくさんの議論がなされた。そして、髪の毛を燃やした火鉢は、私とマギー叔母との長時間にわたる議論を回想させてくれる。マギー叔母は、エリヤの昇天に関しては自説を頑として譲らない決疑論者(決疑論とは、社会的慣行や教会や聖典の掟などを適用して行為の道徳的正邪を判定しようとする議論(方法)=訳者註)であった。ある夏の日、エディンバラに住んでいた私の母親の親類の夫である D が、休暇でオークニー諸島にやってきて、しばらくブーに滞在していた。彼は販売外交員で、ヴァイオリンが上手な、知性の持ち主でもあった。顔は赤く腫れて、ニキビが吹き出していた。また宗教に関しても一風変わった考え方をもっていた。彼はキリストアデルフィアン派(ジョン・トーマス<一八〇五—一七一>が一八四八年に米国で創始したキリスト教の宗派。原始教会の信仰と生活の復帰を主張=訳者註)の信徒であった。彼は聖書に関して詳細だが学術的な知識をもっていた。開明的な考え方をもっていた——というのは、彼は地獄を信じていなかった——にもかかわらず、彼は聖書のテキストに関してプリマス同胞教会派(一八三〇年代に英国人ジョン・ダービーがプリマス、プリストル及びダブリンに創始したカルヴァン主義と敬虔主義との折衷とみられる一派のこと=訳者註)の信徒と同じく、文字通りの解釈をしていた。彼は、一般の人々が考えているように、エリヤが火の戦車にのって天国へ行っただけではないということを見つけた。この説を裏づけるものとして、彼は『列王記下』2: 11 を引用した。

彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。

エリヤは嵐の中を天に上って行った。

Dはここからエリヤは戦車に乗ってではなく、嵐に巻き込まれて天に上ったと解釈したが、マギー叔母はこの解釈を受けつけなかった。彼女は、エリヤが戦車に乗って行ったと教えられていたので、戦車をあきらめることは絶対にできなかった。私は何となく嵐を想像するほうに引かれていた。マギー叔母と私の議論は、Dが一束のパンフレットを置いて立ち去ってからしばらく続いた。父親は後にこのパンフレットを火にくべた。我々はダビデ王についてもいろいろと議論した。ダビデが犯した罪のことを考えると、どうして彼が神に気に入られたのかといったことも議論した。父親はダビデにやや肩を持ち、彼の性格について一種のブルターク風の驚異の念を示して頷いた。だが、母親は決して父親に賛成しなかった。

ワイア島には教会がなかったので、日曜日に、島の人々はボートで狭い海峡をわたりラウジー島へ行かなければならなかった。静かな夏の朝などは、六隻の船がこぞって出港していったものだ。だが、天候が悪く、だれもラウジー島行きを危険を冒そうとしない日が数多くあった。このラウジー島行きの航行のことや、ペリー氏が説教壇に立って頭をうなずかせていたが、その頭が予め書いておいた説教文を片方のみえる目で追っているうちに、次第に斜めに傾いていったこと、さらに彼の薄い髪の毛が頭の中央にあったコイン大のはげを隠すために、頭のとっぺんまでブラシがかけられていたこと、その他、だらしなく伸びていた口髭、褐色でシワのある顔などを今でも思い出すことができる。説教文を彼が読んでいたことはいただけないとみんな言っていたが、彼はみんなからとても愛されていた。人々は原稿などをみないで、その場で考えた説教を自分の言葉で行うのが一番よいと考えていた。

教会から帰えると、いつも、「干しブドウ入りスエットプディング」の後に出てくるチキン（我々はそう呼んでいたが、正直にいうと雌鳥）入りのスープの美味しいごちそうを食べた。セーラー服のことを今また思い出したが、セーラー服といえば、これらの日曜のごちそう、白いテーブルクロスの上に並べられたピカピカのスプーンやナイフやフォークなどを思い出す。週日は、ナイフやフォークやテーブルクロスなどをまったく気にすることなく、ニシンや他の魚が盛られた大きな皿が、ジャガイモの料理とともに、テーブルの真ん中に置かれ、我々はただ手を伸ばして食べただけだった。伝統的なオークニー諸島の客の招待は、「自

分の手で、どうぞ」であったが、客がみえたときには、ナイフやフォークが並べられた。家畜の肉や家禽の肉を食べるのは一週間に一度ぐらいであった。他の農場でも同じであった。それで健康を害したという人はいなかったようだ。我々の夕食はポリッジであった。ポリッジの鍋が床の真ん中に置かれ、我々はみな大きなミルクの入った椀をもって鍋の回りに座り、ポリッジをミルクの中によそって食べた。

我々の食事は町の基準からすると奇妙なものであった。我々は多くの必需品、あるいは必需品と考えられるもの——例えば、牛肉など——なしですましていたが、チドリ、卵、鱒、カニ、ロブスターなど、贅沢品とは知らずにたくさんの贅沢品をもっていた。私は子どものときにカニやロブスターをたくさん食べたので、それ以来食べたいとは思わない。我々の日常の主食といえば、自家製のオートムギのパノック（パノックとはスコットランド地方でつくられる鉄板で焼いた菓子パンのこと。中にはしばしば干しブドウを入れる＝訳者註）、オオムギのパノック、バター、卵、豊富にあった自家製のチーズであった。ワイア島の店で売っていた白パンは贅沢品とみなされていた。台所には引き蓋のついた大きな粉箱があった。中は二分されていて、一方にはオートムギの粉が入っており、他方にはオオムギの粉が入っていた。粉はしっかりと圧縮しておかねばならなかった。そうしないと長持ちしないのである。蓋を引いて開けると、中から濃厚で眠気を誘うような臭気が出てきた。この臭気は脳を直撃し、それで私は朦朧となってしまふほどであった。この臭気は私が度々みた悪夢と関連していた。その夢の中では、私の体はとても大きく膨らんだかと思うと、ゆっくりと萎んでいったが、粉の眠気を誘う臭気は鼻孔を満たした。我々が物の固体性を強烈に認識するのはこの臭気からである。粉箱の中のぎゅっと圧縮された粉の臭気で、私は粉の量がわかった。もちろん表面しかみることができなかったが、その表面はなめらかで、薄っぺらくみえた。私の悪夢は、生き物の数の多さに対する懸念、即ち、世界は固くて膨らんでいる物でびっしり詰まっていて、全部が入りきれないのではないかという懸念が原因となっているかもしれない。これはフランツ・カフカの小説の中で力強く表現されている悪夢的な感覚である。

我々のブーでの生活はほとんど自給自足であった。豚は、毎年、屠殺後切り分けられ塩漬けにされた。そして肉は樽に保存された。私は小さな子どものときから塩漬けの作業を手伝っていたから、生のスライスさ

れた肉を木製の板の上に撒いた粗塩でこすることで、嬉しいことに、自分も大事な存在なのだという感覚を得た。これらの小綺麗な肉の立方体は屠殺された豚と何の関係もないようにみえた。我々は魚を食べたいと思ったときはほとんどいつでも食べられた。またサザランドがカニをとる籠を引上げに行くと、カニが食べられた。そして、マギー叔母は浜辺に行つてエゾパイという貝を採ってきた。オートムギのパノック、オオムギのパノック、ミルク、バター、チーズ、それに卵は自家製だった。我々は羊の毛を刈りとった後、羊毛の一部をボーダーの町へ送り、毛布とか毛織物となって帰ってきた。店で買った物は、白パン、砂糖、お茶、糖蜜、小粒の種なし干ブドウ、レーズン、それにランプ用のパラフィン油などであった。

店のフレッドじいさんはとても気取った人で、エディンバラ訛りのある人だった。この訛りは若い時エディンバラの食糧雑貨店で奉公していたときに身につけたものだった。彼は島で唯一毎日髭を剃り、カラーを身につけていた人だった。それゆえ、彼は島の他の人たちとは違い、絶えずお茶やたばこやパラフィン油の香りを漂わせた司祭を思わせるような人物だった。彼は、夏でも冬でも、店の中でも外でも、麦わら帽子を被り、違いを強調していた。世界を見てきたために、彼は我々の島民気質を軽蔑し、プリンセス・ストリートの高級店にふさわしい彼のエディンバラ仕込みの作法を我々島民に見せつけてやろうとしていた。彼は瘦せた神経質な小男で、恐ろしいほど礼儀正しかった。また彼は穏和ではあるが、細事に拘泥する、妙にこせこせした独身男性だった。彼はもうずっと前に亡くなった。

収穫祭の市は年に一度の一大イベントであった。この祭りはカークウォールで行われ、父親と兄や姉妹たちはそこへ出掛けて行ったが、私は、道中があまりにも長く、疲れるので、連れて行ってもらえなかった。この市の第一月曜日に、ラウジー島とカークウォール間を定期航行していたフォーン号は、ワイア島から少し離れた沖合いに停泊していて——ワイア島には埠頭がなかった——誰かが市に行きたい人たちをフォーン号までボートに乗せて行った。だが、私の家族がどんなふうに出掛けて行ったのかを思い出すことができない。はっきり覚えているのは、ある年に兄や姉妹たちが市から帰ってきたときのことである。私は、気管支炎を患い外へ出ることはできなかったが、兄や姉妹たちの姿が見えると、母親は家のはずれで兄や姉妹たちが帰ってくるのを見てきていいよと言ってくれた。兄

や姉妹たちが廃墟になった礼拝堂の角を通ってくる姿を今でも目に浮かべることができる。兄や姉妹たちはみな一張羅を着ていた。それは静かで、温かい夏の夕暮れのことだった。また彼らは私にお土産を買ってきてくれた。今まで見たことない、風に吹き寄せられた雪のように畝模様のついたピンク色のキャンディとか、黄色いざらざらした棒あめのかたまりとか、これまでになかった焦茶色で、表面がすべすべした菓子、即ち、チョコレートなどであった。チョコレートはあまり好きになれなかった。私はあやつり人形を期待していた。母親が昔我が家にあったあやつり人形のことを度々話してくれていたからだ。だが、市であやつり人形を手に入れることはできなかった。これはもう流行らなくなってしまったのだ。代わりに大きな木製の卵で我慢しなければならなかった。この卵は、開けると中から蛇がサラサラと音を立てて勢いよく飛び出てきた。私はこれまでそれほど多くのおもちゃを持ったことはなかったし、おもちゃに心から満足することもなかった。喜びとか楽しみは、失望が底流する意識的な見せかけだった。私はいつもそれぞれのおもちゃにできる以上のことを期待した。

ワイア島では客が来ることはめったになかった。というのは、この島では、よほど穏やかで静かな天候でなければ、目的の場所まで行くことは難しかったからだ。ピリー氏は時々教区民を訪ねたり、学校で祈祷会を開いたりするためにラウジー島からやって来た。青いサージのスーツを着た陽気な青年の競売人が、ある雨の寒い午後、カークウォールからやってきて——彼は別の農場で仕事があったのだ——私にサンドウィッチをくれた。私はそれをはじめて見た。彼のポケットにはたくさんのサンドウィッチが入っていた。また、ある夏の夕方、とても幅が広くて堅いカラーとともに柔らかいグレーのスーツを身につけた風変わりな男が我が家の扉をノックした。彼は、か細くてめめそした口調のかん高い声で話をした。彼はとてつもなく礼儀正しく、愛想もよかった。顔は真っ青であったが、しゃべったり、くすくす笑ったりすると、体が上下左右に飛び上がった。それで私は父親のかげに隠れ、そのかげから彼を覗いていた。我々は彼にどう対処したらいいのかわからなかったが、彼が立ち去った後、サザランドは、彼は「ムーンストラック (moonstruck)」だと言った——この「ムーンストラック」という形容詞は、当時オークニー諸島では狂人を意味していた(因みに、OEDによれば、この語の初出は、一六七四年のミルトンの『失楽園』である=訳者註)。正気でなかった裕福な青

年たちは、当時、度々遠方の島々の農場に送られてきた。実に多くのこうした青年たちがオークニー諸島にやってきた。オークニー諸島の人たちは彼らにあだ名をつけ、何の仕事もしないで食べていたので、彼らを「食う人たち」と呼んだ。我が家を訪ね、我々を面白い話で笑わせようとした哀れな男も、やはり「食う人」で、ラウジー島の農夫の世話になっていた。この農夫は哀れな男に小銭をやりたいと思い、ワイア島をあちこち歩き回らせるためにラウジー島から連れてきては帰って行った。

ワイア島での最も親しい友人は、ハー (Haa) のリッチ家の人たちだった。このすてきな家族は冗談を言って人を笑わせ、楽しくさせるセンスを持っていたが、立ち居振舞いは上品であった。父親のジョン・リッチは私の父親の一番の親友だった。二人はディアニスで隣り同士であり、またワイア島でも互いの農場が隣り合っていた。ジョン・リッチは農夫であるだけでなく、腕の良い仕立屋であり、また優れたヴァイオリン弾きでもあった。彼はこれまで見たこともないハンサムな男の一人だった。すらっとして背が高く、額も広く、鼻筋も通っていて美しかった。そして顎髭もきちんと整えられていた。彼は他の農夫たちよりも身なりにうるさかった。また彼は、威厳はあったが、滑稽なところもあった。これには面食らってしまった。彼とサザランドの間に一種の争いが起こった。そして、ジョンが我が家に来ると、サザランドは必ず、ジョンをいらさせようと、うその話をひきまきらず次から次と並べ立てた。しかし、ジョンは、冷静さを失わず、徐に「サザランド、お前がうそを言っていることは、お前だってお前の良心にかけて知っているんだらう」と言った。そして、サザランドは厚かましくも、「わしがうそを言っていないことは、わしの良心にかけて知っているよ」と答えた。この応酬はいつまでも続いたが、我々はただ芝居を見ているように見ているだけだった。

我々が話した言語は、ノルウェー語、スコットランド語、アイルランド語の混ざったものであった。二人称単数形が多用され、ドイツ語やフランス語で使われるように、使われた。友だちなどには「*thú*」とか「*thee*」と言い、他方見知らぬ人や役人などには「*you*」と言った。我々は確かにそれらをきちんと区別し、決して迷うことはなかった。男性はたいていゆっくりと落ち着いた声で話したが、女性の中には、島の静かな一本調子の軽快なリズムで早口でしゃべる者もいた。このことは千年以上変わっていない。というのは、オークニー

諸島の人々、あるいはこの島のノルウェー系の人々は、千年以上も前にノルウェーの南の小さな二つの溪谷からやってきたからだ。言語全体の構造は変わってしまったが、こうした人たちの声の抑揚は、これらの溪谷の現在の住人たちのそれと変わらず同じである。それはソフトで耳に快い抑揚であり、やや哀愁を帯びているが、親しみやすいものである。それはまた、長い冬の夜、何時間も話をすることに慣れている人々や、急ぐ必要がないと思っている人々の声であり、物語を語るのにうってつけのすばらしい声である。その声は今でも聖歌などを詠唱するのにふさわしい特質を保持している。言葉というのは、初期の段階では、常に詠唱されるものだと思う。というのは、言葉はほとんど奇跡的なものとして大切にされるほど新奇なものであるからだ。そして、その新奇さが次第に消えて、言葉は広く使われるようになり、当たりまえのものになっていくのである。

オークニー諸島の語法には、昔からすばらしい倒置法があるし、また *moonstruck* とか *phial* とか *sib* といった古い言葉もある。Tells *thú me yon?* (私にそのことを話してくれますか)、これが通常の語順である。That *wad I no* は、「私はそのようなことは考えない」の強調表現である。このような文構造を重んじる感覚は、普通の都市や教育のある人たちのそれよりもかなり強いし、またこの感覚は十七世紀のそれに一層似かよっている。こうした伝統的な倒置法は、文章の語順にそれ相当の価値を与えているのだが、教育制度によって一掃されてしまい、今現在残っているのはほんのわずかである。オークニー諸島の詩人のほとんどは、文法書で苦勞して学んだ英語を駆使して詩を書いているが、その例外は二人のとても優れた詩人、ロバート・レンダグ (一八九八—一九六七、グラスゴー生まれ。幼いときに両親と共にオークニー諸島に移住。以来生涯をオークニー諸島で過ごす。作品に詩集 *Country Sonnets* (一九四六)をはじめ、*Orkney Variants* (一九五一)、*Shore Poems* (一九五七) や *History, Prophecy and God* (一九五四) などの神学的著作や、*Mollusca Orcadensia* (一九五六)、*Orkney Shore* (一九六〇) などの科学的著作などがある) とジョージ・ブラウン (一九二—一九六、オークニー諸島生まれ。エドウィン・ミュアが学長をしていたニューバトラー・アビー・カレッジに入り、彼から創作上の助言や励ましを受けた。作品に処女詩集 *The Storm, and Other Poems* (一九五四)をはじめ、*Loaves and Fishes* (一九五九)、*Fishermen with Ploughs* (一九七一)、*Voyages* (一九八三)、*The Wreck of the Archangel* (一九八九) など、自叙伝に *For the Islands I Sing* (一九九七) やその他、短編集や小説、エッセイがある = 訳者註)

である。島は相当の数の学者先生を生み出しているが、島のこかしこの素朴で教育のない庶民は、今なお美しい言語を話しているし、文章のどこに言葉を入れたらよいかも心得ている。

よい生活というものに対する私の考えがどのくらい幼児期の養育に影響されているかわからないが、ワイア島という小さな島での生活はよいものだったように思えるし、またその罪は許される肉体の罪であって、決して精神の罪ではなかったと思う。農夫たちは野心のかけらも知らなかったし、また、ヴィクトリア女王治世の末期に生きていたにもかかわらず、競走というものがどんなものかわかっていなかった。農夫たちは、昔からの習慣に従って、助けが必要なときは、お互いの仕事を助け合った。彼らは伝説や民謡、聖書の詩文などで成り立った文化をもっていたし、大地に対する本能的な感情を是認する習慣ももっていた。彼らの生活は一つの秩序、よき秩序であった。それゆえ、私が十四歳のとき、父親と母親がオークニー諸島を去ってグラスゴーに向かったとき、我々は秩序から混沌へ投げ込まれたのだった。そのときは我々はそのことを知らなかった。私もグラスゴーを去ってから何年もの間そのことがわからなかった。父親と母親と二人の兄がグラスゴーに来てから二年以内に次々と死んだ。家族の四人が二年間のうちにグラスゴーで死んだのだ。これこそ一大変化の尺度というものである。

私はヒーリー (Helye) で一年をぼんやりと記憶しているだけである。その年の末に我々はワイア島を去り、カークウォール近郊の農場へ移っていった。その年、私はずっと恐ろしい罪の攻撃にさらされていた。これ以外に覚えていることといえば、ヒーリーはブーほど決して好きなどころではなかったということである。ブーは快適な家のようなところであった。

ワイア島を去った後何年もワイア島の夢を見ることはなかった。私のワイア島での生活がまるで忘れ去られたかのようにであった。ワイア島の夢を最初に見たのは、二十五年後で、ロンドンで精神分析を受けていたときであった。私は船のへさきに立っている夢をみた。早朝のことで、空と海も乳白色であった。船はさらさらと音を立てて進み、どんどん深くなっていく湾曲した水平線を深々と切り開いて航行していった。渦巻きが海の向こうの上空に立ち上った。そして、船がすすいと疾走していくと、すぐさま、私は小さな通り、外壁から生え出たとげのある雑草、棧橋から垂れ下がっている海藻などをみる事ができた。家々は開け放たれ、溶けてともに流れた。一瞬、私もそこに行っ

てみたいと思ったが、その町は私が知っている町ではないし、街路を歩いている人たちも私の知らない人たちばかりだということがわかった。船はどこかへ消えてしまっていた。私は高くそそり立つ岩だらけの海岸の天辺をぶらぶらしていた。眼下では波が洞窟の中うなり声を上げていた。そして洞窟は、海の怪物のように、波にかみつき、それを吐き出すのであった。反対方向の荒れ狂う海峡の向こう側には、山が黒々と聳えるラウジー島が、手を伸ばせば触れるのではないかと思えるくらい近くにあった。ワイア島の海岸がそんなにも荒々しく岩だらけだとは思ってもみなかった。そう考えたときでさえ、島は飼いやられた動物のようにおとなしくなっていたし、まったく生気がないくらい静かであった。そして、私は、手にするとたちまち萎んでしまう、ばかでかくで軽い、王冠型の花々を摘みながら、海面と同じ高さの一本の茶色の小道を歩いていた。すると、岸辺の小さな礼拝堂に出くわした。そこの外壁のひとつに茶色の陶製の像が掛かっていた。それは風雨にさらされた老婆の像で、腰まで裸で、乳房は日に焼けて皺が寄っていた。私はその像に近づき、何か儀式でも行うかのように、指で片方の乳首を押しつけた。身震いが像の全身を走り、返す波のように、像の肌理が変わってしまった。像がぶるぶると震えると、たちまち生命のさざなみが像をよぎった。そして老齡の痕跡は透明な洪水にさらされてあとかたもなく消え去ってしまった。すべすべした、丸みを帯びた胸は輝き、膨らんだりへこんだりしていたが、私は同時に胸の奥で、熱くてひりひりと痛みを覚える火を感じていた。私は、黄色い太陽が、そこをざらざらと照りつけ、私の体を軽やかに柔らかい力で満たしてくれた光線で、像を死者から蘇らせたのを知った。像は、黒褐色の少女だったが、外壁から降りて、私の側に立った。夢について覚えているのはこれだけである。そして、この夢はブーに到着しないうちに終わってしまったが、夢のあの場所にもう一度戻ってみたいと思った。それは、あたかもその夢がとても好きだったあの家に私を連れ戻そうと、何か別のものを私に提供しているかのようにであったし、またあるかないかわからない別の像を蘇生させようとしているかのようにもであった。

後に、ブーの夢もみた。しかし、外観はことごとく奇妙に変化し、何もかもが入れかわっていた。私は曲がりくねった小道を登っていた。長い間、ここを留守にし、今老人になってここに戻って来たのであった。とても大きな木々はその家の周りに立っていた。その木の葉全体は前に見たよりもいっそう黒く濃くなって

いたが、互いに重なり合って垂れ下がっていた。そしてその不動の安定性はどんな風も揺るがすことができないものだった。その木々の背後に外壁がみえた。分厚い壁は時間の経過と共にとても丸みを帯びて柔らかくなり、突出した角などは何も残っていないほどだった。真ん中に古い城の門のような大きな木造の門があった。その家を低い灰色の空が被っていた。その家を被う特別な空であった。もの凄く大きな外壁と黒々とした木々と低くて丸い空以外に何もなかった。私は立ち上がり、その家を密かな期待を込めて眺めたが、中には入らなかった。

もう一つの夢もワイア島に関わるものであるが、今述べた二つの夢と比べると、直接的なものではなかった。だが、どのようにして幼児期の印象が大きく成長して、神話を形成するに至ったかを示すために、その夢を述べてみようと思う。五、六歳だったときのある日、マギー叔母が家の下方にある池の向こう側に立っている一羽のかすかに輝いているグレーの鳥を指し、「見てごらん。サギがあそこにいるよ」と叫んだ。叔母が指さすと、サギは空中に舞い上がり、いともたやすく大きな翼を広げてどこかへ飛んでいってしまった。私は恐れ戦いたが、同時に大きな鳥がゆっくりと羽ばたいていくのを見て不思議に思った。そして、「サギ」という名前には何か意味があるにちがいないと思った。夢の中で、私は何人かの人といっしょに田舎を歩いていた。そのとき、野原で輝いているグレーの

鳥を見た。そして、振り向いて、畏敬の念を込め、「サギだ」と言った。我々は近づいていったが、近づくにつれ、サギはクジャクのように尾を広げた。それで、何も見えなくなってしまった。尾が大きくなると、それは円形ではなくて四角で、見通せないグレーの羽毛の垣根のようであった。その体は鳥の体ではなく、動物の体であった。あの輝いている垣根に隠れて、サギはヒョウや虎のように四つ足で歩き、我々から遠ざかっていったのを知った。その後また、野原でサギと向き合っていると、年老いた羊か、もしくは疥癬に罹った犬の頭のような頭をもった、大昔いたような、汚い土色の動物が現れた。その目はやさしく茶褐色であった。その動物は立派な尾をもつ獣と対峙し、断固としてあとにはひかず、その結果が死であろうと、単なる屈辱であろうと、痛みであろうと、迫り来る危険にたち向かおうとしていた。両方の動物の表情から、彼らがお互いに知り合いであり、これまで数え切れないほど何度も戦い、従って、この戦いの後もまた戦うだろうということも知っていたし、また毎回の対戦が最初の対戦であり、色の濃くて辛抱強い動物がいつも負けて、色の明るい獰猛な動物がいつも勝っていたということも知ることができた。戦いは見なかったが、それは、おそらく何か意味があるのかもしれないが、決してやすらぎのない、残酷で恥ずべき戦いであつたろうということを知った。